

2023年度 子ども学コロキウム 第20回八戸大会に向けて —子ども・祭り・絵本—

2024年度の第20回子ども学会議が、青森県八戸の認定こども園八戸文化幼稚園で開催される。絵本教育に力をいれる開催校ならではのテーマでさまざまな魅力的な演目が計画されているが、さらに初めての東北開催として、開催地ならではの特色ある豊かな子ども文化を反映した学術的な取り組みを、コロキウムという形で展開したい。

そこで着目したのが「祭り」である。

子どもが参加する祭りは全国枚挙にいとまがない。

祭りは”ケ”（日常）に対する”ハレ”の場として、非日常を演出する公共的な営みであり、それぞれの文化の世界観や精神世界のあらわれとして、民俗学、社会学、文化人類学などから、その意味と機能に関する理論化が試みられている。

しかし「祭り」が、特に子どもにとってどのような意味を持つのかは、どの分野でも体系的に研究されてこなかったようだ。これは学術上の盲点であるとともに、子ども学にとって探求に値する興味深い対象ではないだろうか。

祭りは「遊び」でもなければ「生業」でもなく、そして日常ですらない。その発達段階に応じて、共同体のあらゆる年齢、職業、性別の人たちの中に、特別な役割をもって関わらせられるきわめて特異な場が作り上げられている

そこで子どもと子ども以外の人々はどのように出会い、それぞれは日常では経験することのできない何を経験するのか。それが共同体の中における子どもの成長にとって、また共同体の成員全体にとって、何を意味するのかを、科学的に問い直してみたい。

東北地方は有名なねぶた/ねぶた(青森・弘前・五所川原など)をはじめ、男鹿半島のナマハゲ、八戸えんぶりなど、独特の子どもを巻き込んだ祭りが盛んであることを考えた時、この機に「子どもと祭りー祭り子ども学」について考える絶好の機会であると思われる。

そこで来年度の第20回子ども学会議の八戸での大会開催にちなみ、それぞれの土地を代表する祭り、ナマハゲと八戸えんぶりを題材とし、それぞれの祭り開催時期に合わせて、子ども学コロキウムを企画する。

また大会直前の8月には絵本と子どもをテーマとしたプレコロキウムも企画している。